銀杏山神社の歴史は、西暦 658 年までさかのぼる。この小さな神社は、七座山（標高 287 m）の山麓にたたずみ、北本州および北海道の先住民である蝦夷との戦いにおける、有名な将軍阿部比羅夫（575～664）の勝利祈願のために建立された。

神社は 1350 年以上の歴史があるが、今は、3 世紀以上もの間、敷地内に生え続けているイチョウの木で最も有名である。これらのイチョウの木は、「イチョウの山」を意味する神社の名前の由来にもなっている。イチョウは、葉や枝の水分が非常に多く、燃えにくいため、日本の多くの神社や寺に植えられている。イチョウが火災に対する自然の防御として機能するからである。

神社に最も近い、高さ 28 メートルの「乳柱のイチョウ」は、数本の木が密生してできている。地元の言い伝えによると、この木の前で願をかけると、母乳が出ない女性の助けになるという。この言い伝えは、江戸時代（1603～1867）に、藩主の佐竹家の妻が願い事を紙に書き、それを木の枝に結びつけたことからはじまった。彼女の願いが叶ったことで、神社は佐竹家の家紋の使用を許可された。

神社の左側の小道をさらに進んだところにある「連理の銀杏」は、実は同じくらいの高さの 2 本の木である。連理という言葉は「親密な男性と女性の関係」を意味することもあり、二本の木が夫婦を表しているとみられ、夫婦の調和の象徴と考えられている。ロマンチックなパートナーを探している人は、息を止めて、幹の間のアーチを通って 8 の字を描きながら木のまわりを 3 周することをお勧めする。そうすると、願いが叶うかもしれない。